「野薔薇」を産む苦しみ（其一）

吉田藤吉

作詩以前

人が此非凡な靈と人物とを，方面の異るにつれて異る色を放つ，多面的なダイヤモンドに譬えるのは，至當である．それ故に，彼が境遇の異るにつれ，又人の異るに對して異つていた．[1]

人は絶えず，私を運命の寵兒のように，賞めたゝえる，しかし，それは畢境するに勞苦と努力以外の何ものでもなかつた．そして恐らく我が七十五年を通して，眞の樂しみを一ケ月とは有たなかつた，と私は言えるだろう．[2]

人がその生活の危機に於いて病になることのあるのは，決して稀なことではない，その場合病はその危機の身体的な現れである．蓋し体は精神の，而て精神と有機的な連がりにある容器であり，從つて，人は生活の絶望や内部的な破綻に瀕する時，平生に於けるよりも，病になり易いのである．「多くの小説に於いて，危機に立つ主人公が突然病になると言うことは決して詩人の発明ではない．それは，縺れを解きほぐすために，任意に造出されるような deus ex machina[3] ではなくて正しい觀察である．[4]

しかし，他の意味に於いて「病は危機の結果ではなくて，反対に危機の元因である．」[5] この場合病は，他の苦難と同じように，人をして他への顧慮が正しさを失い，或は盲になる程に，自己のみについて強く意識配慮せしめつゝ，自己保存本能や，利己的衝動を醒めしめる．而して，其人の未だ真実とならざる借物の知識や，似而非的道学の仮面を剥ぎ，不確信にし，泣虫にする．

嘗てグレーチヘンとの．子供らしい失恋に身心共に痛手を負うたように，[6] またしてもライプチッヒの学生生活にあつて，学問，文芸，社交，恋愛に行づまつて，絶望と破綻とに瀕した蒲柳の若きエロス・ゲーテが，[7] 胸の病に冒されつゝ愛人，ケーチヘン，と己とを衝動的な嫉妬と猜疑と我儘と泣事とで苦しめたことは，当時の彼の友ベーリッシュ宛書簡に訴えられ，[8] 戯曲「恋する者のむら気」[9] や「同罪者」[10] に懺悔せられ，自叙伝「詩と真実」[11] に告白せられたところである．

善人は，たとえ暗黒の衝迫（うながし）の中にあつても正しい道を屹度承知しているものだ．[12]

Kranksein は Leiden を意味する，Leiden は Passivsein の謂である，病人はわけても弱者となり，活動を抑制せられ，無力となり，他者の助けと導きとに委ねられ，此世に対し Passiv-sein たることを明にせられる．

自らの恋のむら気に病み，「弱き者の名」[13] をば己が若き姿に認めざるを得なかつたゲーテはやるせない己が Passivsein をベーリッシュにかこち，[14] 又学友達の深情に看とられ，[15] その厚い世話に送られて帰郷し，[16] 父のきびしい注意や，[17] 母の慈愛ある雙手と，練達の医師メッツの秘薬と，[18] 殊に「肉体よりも寧ろ魂に於いて患うように見える病兒」として，[19] 敬虔なる「美しき魂」[20] クレッテンベルグ嬢[21] の導きとに委ねられなければならなかつた．

Leiden は Schmerz haben の謂である，劇しい痛みは，非常な不快と大きな不安とを伴う．それは memento mori[22] であり，生命のリズムの中絶の思いである．それは，人生に投ずる宿命として，自然への没落のように，存在の営みに終止符を思い置かしめ，夏の「薄明の夜」[23] の大空のように，却つて人の靈を永遠なるものに向つて醒まし，活かしめる．

Leiden は更に erdulden 又は ertragen の謂である．それは，人間の罪に対して課せられたものとしての罰の耐え忍ぶべきことを意味する．即ち Leiden は罪に対する懺悔と犢罪を意味し，敬虔に体験することに於いて，却つて浄化となり，救いとなり，恩恵となる．かくて，Leiden は，恩恵に満ちた友として，人の霊を根源的に真実清新ならしめ「世界を奥の奥で統べているもの」[24]の子となし，それを担うものとなすのである．

ライプチッヒに於ける行きづまりと破綻とによる若きゲーテの病は，言はば本源に即せず，内実の伴わぬ早熟に対する自然のきびしい罰として，彼の精神をば根底から震撼した．[25]「それは，彼の不確信を日日に増して――彼の考えを完全に一変すべきことを強い――従来彼の愛し善しとしていた凡てのものの放棄を求めたのである．」[26]既に Passivsein としての彼は是を最早素直に受けて，彼の，少年時代からの優れたものとして携えた作品や日記やその他一切の書き物を，二回にも亘つて，自ら火刑に処した程に，[27]過去を清算し，又嘗て彼との交際を，彼の驕慢に煩わされて，避けていた信仰深い学友達が，凡てを忘れて病める彼を看護してくれた深情に，[28]彼の頑な心は，解きほぐされざるを得なかつた．当時ケーチヘン宛にも彼は「ライプチッヒ時代に犯した罪のために，今罰せられているのだとは，仰せの通りです．」[29]と語つた程に心柔いだのである．Leiden は遂に浄化となりつゝあつた．彼の幼少の折のリスボンの大震災[30]に対する傷心は，未だ対岸の火災に対する幼い震撼を多く出なかつたとしても，今や「難波した者のように」[31]帰郷して，自ら「悲しむ者」[32]は将に「慰められん」とする者であつた．即ち彼の心はクレッテンベルグ嬢の導きによつて，増々，神の愛（アガペ）に慰められるべきを感じたのである．[33]又彼を再度の重患から救つた医師メッツの秘薬にこもる奇蹟にも，彼の魂は素直にひらかれたのである．[34]此頃のゲーテが如何に絶対者の愛に醒めていたかを，彼は学友ランゲル宛書簡に次のように語つている．「あなたの教説が私の心に如何なる影響を及ぼしたかは，私にはよく解ります．宗教に対する愛と謙虚，福音書に対する好感，かの言葉に対する敬虔など，要するに，あなたのなし得た凡てのことが，私にはよく解ります．」[35]「ペテロは私達のような男でした．――若し彼にして，イエスには天と地と海とを支配する力があるのだ，と確く信じていたら，彼も足を濡さずに海の上を歩いていたことでしよう．疑惑の念が彼を沈めてしまつたのです．――遂に救主は私を捉えました．私は，彼に対して，余りにも久しく，余りにも迅く走つていました．彼は，私の髪の毛を摑んで，私を捉えたのです．」[36]此「救主が私を捉えた．」と言う経験こそは，ゲーテの内面的生活に於ける真剣な直接経験であり重大な根本経験であつた．此経験の瞬間の後にこそ始めて言葉が彼の所謂 taT[37] たり得るのであり，此後に於いて彼が――潔癖な啓示主義の立場から，或は芸術に対する狭量な教説，人生の完き堕罪を主張する説教等への不満から――若きファウストのように教会の信仰から離れ迷うかに見えても，[38]彼の自覚の奥に於いては，神の手繰る手綱からは離れきつてしまうことが不可能になるのである．[39]

結核や痛風のような慢性の病にある人は，特殊な立場に置かれる．即ち彼の生活は，其病の Leiden によつて，限定せられつゝ継続する．彼は此限定を，所与の大きさに於いて，生活に算入しなければならない．即ち彼は，彼の病と結びつゝ闘わなければならない．それは，彼の霊が強いか．或は其病にも一応安じて生活するか，或は其病魔が勝を制するか，と言うような忍従執拗な闘である，かくて慢性の病は，人の生活に強く影響しつゝ，其人のスタイルを規定する．結核や痛風や，ヒコボンデリーの病人が，屢々美しい文芸に於いて示されるような特殊なタイプをあらわに有つているのは，此理由に基くのである．[40]

エロス・ゲーテの Leiden に於ける病も，彼の向上と浄化につれて，次第に勢を減じつゝも彼の霊とデーモンとの相克に於ける重大な危機に屢々台頭して，彼のデモーニッシュな衝迫に[41]

不思議な警告をなす時，人が意外とする程に，彼が敢然として此警告に聴いたことは，一つの看過し得ざる現象であらう．

病が其頂上を越え，恢癒が近づき，病人が恢復期患者となると，彼にとつては，嘗ての病中の苦痛を償うて余りあるような美しい時期が恵まれ始まる．生と生の喜びとの美しい表徴である春と花とは，今こそ病癒えた彼の窓辺に相応しいものとなる．彼は生命の此世に於ける新なリズムに醒める．その初め，余りにも惨めに見えた生命，やがて病中何物にも勝つて尊く感ぜられた生命が，今や再び彼に日日清新な気力となつて贈られる．病中禁ぜられていた故にも望ましく思われたことが除々に許されて，練習する歩行の一歩一歩も幼児に於けるような喜びである．自然の光うららかに描き出された世界に比べては，最早病室，其処で相当茶痛を嘗めた場所は，彼に厭しくなるのである．[42] 健康であることを余りにも自明のこととして嘗ては足下に踏みにじりもしたものを，今や Kranksein が何を意味し，健康の価値の何たるかを，彼は深く体験して，新に発見した世界に飛揚せんと望み，[43] 或は更めて人々の社会に彼に相応しい気力で活動せんと願う．[44] このことは，多くの人々に於けるようにゲーテにもそうであつた．

一七七〇年一月二三日病癒えたゲーテは，新しい春の希望をば乗せて，かのケーチヘン宛に次のように書いている．「私が穏やかに生活していること，これが私について申上ける一切です．女の子などは一切私の頭の中にはありませんから，活潑で，健康で，勤勉です――．然し万事をよく考えると，私はとうとうフランクフルトに飽きたようです．――私は三月の末にはストラスブルグに行きます．」又自叙伝にも「春になると私は健康の恢復を感じた．それにも増して，私は自分の青春の元気の再び蘇つて来るのを感じた，そして私は父の家から出たいと言う憧れを覚えた．[46]」と語つている，二月六日にはクリスチアン・コツトフリート・ヘルマン宛にも「三月の末頃，更に飛翔を試みようと思います．最初は，ストラスブルグへ行き，其処で法律学の学位を獲度いと思います．其処からパリーへ進みます．巴里から――それは神ぞ知り給う．[47]」と書いている．

それにしても Leiden は余りにも速に忘れ勝ちにも見える．

「野薔薇」の錯綜

一行といえども彼の經驗しなかつたものはないが，一行といえども彼の經驗のままではない，ゼーゼンハイムの物語についても同様である．[48]

歌姿の単純素朴なるにも拘はらず，既に五十以上の曲譜に移され，[49] 殊にウエルナーによつて[50] 有名なメロデーを附され，シューベルトによつて特徴的な調子を与えられて，人口に愛誦せられ，人心を嘆息せしめる小曲「野薔薇」をゲーテが自作として公にしたのは，一七八九年の彼の詩集に於いてであつた．然るに形式と内容に於いて此「野薔薇」に全く似ている無名の詩を譚詩として，ヘルダーが[51] 既に一七七三年，ゲーテの「野薔薇」の発表に先立つこと十六年，彼の著書 "Briefwechsel über Ossian und die Lieder alter Völker,, に彼の民謡論の一例にあげて「是はドイツの古い童謡であるよし」と前提して，第五行に「私は此行を只記憶から補つた」と註を附し，「これは童謡であろうか」と疑を載せて公にしている．更に是の僅に訂正したものを「野中の薔薇」と題して，一七七九年彼の民謡集第二部に転載した．次にゲーテの「野薔薇」とヘルダーの譚詩「野中の薔薇」及び其訂正「野中の薔薇」を比較のために示せば（相違点に下線を引く）

Heidenröslein Goethes

Sah ein knab ein Röslein Stehn
Röslein auf der Heiden,
War so jung und morgenschön,
Lief er schnell, es nah zu sehn,
Sah's mit vielen Freuden.
Röslein, Röslein, Röslein rot,
Röslein auf der Heiden!

Knabe sprach: Ich breche dich.

Röslein auf der Heiden!
Röslein sprach Ich steche dich,
Dass du ewig denkst an mich,
Und ich will's nicht leiden.
Röslein, Röslein, Röslein rot,
Röslein auf der Heiden.

Und der wilde knabe brach
's Röslein auf der Heiden;
Röslein wehrte sich und stach,
Half ihm doch kein Weh und Ach,
musst' es eben leiden.
Röslein, Röslein, Röslein rot,
Röslein auf der Heiden.

Fabelliedchen von Röslein auf der Heiden (1773)

Es sah ein knab' ein Röslein stehn,
Ein Röslein auf der Heiden.
Er sah, es war so frisch und schön,
Und blieb stehn, es anzusehn.
Und stand in süssen Freuden.
Röslein, Röslein. Röslein roth,
Röslein. auf der Heiden!

Der knabe sprach: „Ich breche dich!
Röslein auf der Heiden!"
Das Röslein sprach: „Ich steche dich,
Dass du ewig denkst an mich,
Dass ich's nicht will leiden."
Röslein, Röslein, Röslein roth,
Röslein auf der Heiden.

Doch (Jedpoch) der wilde knabe brack
Das Röslein auf der Heiden;
Röslein wehrte sich und stach,
Aber er vergass darnach
Beim Genuss das Leiden.
Röslein, Röslein Röslein roth,
Röslein auf der Heiden.

Röslein auf der Heiden (1779)

Es sah ein knab' ein Röslein stehn
Röslein auf der Heiden,
Sah, es war so frisch und schön,
Und stand in süssen Freuden:
Röslein, Röslein, Röslein roth,
Röslein auf der Heiden!

Der knabe sprach Ich: „breche dich!
Röslein auf der Heiden!"
Röslein sprach: „Ich steche dich,
Dass du ewig denkst an mick,
Dass ich's nicht will leiden."
Röslein, Röslein, Röslein roth,
Röslein auf der Heiden.

Doch der wilde knabe brach
Das Röslein auf der Heiden;
Röslein wehrte sich und stach,
Aber er vergass danach
Beim Genuss das Leiden.
Röslein, Röslein, Röslein roth,
Röslein auf der Heiden.

ヘルダーは彼の以上の詩を民謡として発表したのであるが，然し，ドゥンゲルの[52]主張するところによれば，民謡集の著名な発行者達は何れも，以上のヘルダーの発表したものを，嘗て民謡として採録していない．即ち民謡として認めていないのである．又何処にも是が実際に民謡として歌われたることを聞かない．但しストラスブルグ大学図書[53]にある一六〇二年発行の „Liederbuch Pauls von der Aelst" に „Sie blühet wie ein Röslein" と云う行を第一節に含み„ Der die Röslein wird brechen ab, Röslein auf der Heiden, Das wird wohl tun ein junger Kanb. „と云う三行を第二節に有ち且つ目につくのは各節に „Röslein auf der Heiden" と言う折返しを有つていて恰も „Röslein auf die Heidein" との関係をば暗示するような次の民謡が載つている，とのことである．（下線は暗示の個所を示す）

Sie gleicht wohl einen Rosenstock,
Drum gliebt sie mir im Herzen,
Sie trägt auch einen roten Rock,
Kan züchtig, freundlig scherzen,
Sie blühet wie ein Röslein,
Die Bäcklein wie das mündelein;
Liebst du mich. so lieb ich dich,
Röslein auf der Heiden!

Der die Röslein wird brechen ab,
Röslein auf der Heiden,
Das wird wohl tun ein junger kanb,
Züchtig, und bescheiden,
So stehn die Stenglein auch allein,
Der lieb Gott weiss wohl wen ich mein:
Sie ist so grecht von gutem Geschlecht,
Von Ehren hoch geboren.

Wann mich das mägdlein nit mehr will,
Röslein auf der Heiden,
So will ich weichen in der Still
Und mich von ihr tun scheiden,
So will ich sie auch fahren lan
Und will ein andere nehmen an,
Ein hübsche schön Jungfraue,
Röslein auf der Heiden.

Das Röslein das mir werden muss,
Röslein auf der Heiden,
Das hat mir treten auf den Fuss
Und gschah mir doch nicht Leide,
Sie gliebet mir im Herzen wohl,
In Ehren ich sie lieben soll,
Beschert Gott Glück, gehts nicht zurück,
Röslein auf der Heiden.

Behüt dich Gott, mein herziges Herz,
Röslein auf der Heiden!
Es ist fürwahr mit mir kein Scherz,
Ich kann nicht länger beiten,
Du kommst mir nicht aus meinem Sinn,
Dieweil ich hab das Leben inn;
Gedenk an mich wie ich an dich,
Röslein auf der Heiden!

Beut mir her deinen roten Mund,
Röslein auf der Heiden;
Ein Kuss gib mir aus Herzensgrund,
So steht mein Herz in Freuden!
Behüt dich Gott zu jeder Zeit,
All stund und wie es sich begeit,
Küss du mich, so süss ich dich,
Rölein auf der Heiden!

Wer ist der uns dies Liedlein macht,
Röslein auf der Heiden?
Das hat getan ein Junger Hacht,
Als er von ihr wollt scheiden;
Zu tausend hundert guter Nacht
Hat er das Liedlein wohl gemacht,
Behut sie Gott ohn allen Spott,
Röslein auf der Heiden!

ウーランド[54]も又 Nürnberger Liedersammlung von 1586 で以上の民謡の異作の第三節だけを発見したゝと云う．それは

Will uns das maidelein nimmer han,
Rot Röslein auf der Heiden,
So wöllen wirs nur fahren lan,
Ein, anders wollen wir nehmen an,
Ein schönes, ein junges, ein reiches, ein frommes,
Nach adeligen Sitten.

ウーランドは，是に「両地において一つの古い民謡が基本になつたらしい．」[55]と註を附している．それにしても，譚詩「野中の薔薇」に似た民謡は，矢張り何処にも見出されない．と言う主張[56]は定肯せられざるを得まい．かくて其等は民謡ではなくて，創作歌謡であると言われている．

茲に於いて我々は「野中の薔薇」の跡を民謡に求めることを措いて，ヘルダー及びゲーテの文献と生活に直接手がゝりを求めることが，一つの残された道であろう．而して其道にこそ，困難ではあるが，有力な道標と思われるものが見出される．それは先づヘルダーの許婚者で，[57] ダルムシュタットに住んでいた．カロリーネ嬢が，一七七一年六月編纂に当つた das silberne Buch に譚詩「野中の薔薇」と形式内容共に相似た詩 Die Blüte の載ていることである．この詩をば，彼女は一七七二年六月末或手紙で，ヘルダーのものであると述べている，とのことである．その詩を譚詩「野中の薔薇」との比較に資しよう．

Die Blüte

Es sah ein knab ein knöspgen stehn
Auf seinem liebsten Baume,
Das knöspgen war so frisch und schön,
Und blieb stehn es anzusehn
Und stand in süssen Traume.
knöspgen, knöspgen frisch und schön,
knöspgen auf dem Baume.

Der knabe sprach: Ich breche dich,
Du knöspgen süsser Düfte
Das knöspgen bat: verschone mich'
Denn sonst bald verwelke ich
Und gab dir nimmer Früchte.
kanbe, kanbe, lass es stehn,
Das Knöspgen süsser Düfte.

Jedoch der wilde knabe brach
Die Blüte von dem Baume.
Das Blütchen starb so schnell darnach,
Aber alle Frucht gebrach
Ihm auf seinem Baume.
Traurig traurige sucht' er nach
Und fand nichts auf dem Baume.

Bricht nicht, o Knabe, nicht zu früh
Die Hoffnuug süsser Blüte.
Denn bald, ach bald verwelket sie,
Uud denn siehst du nirgends nie
Die Frucht von deiner Blüte
Traurig, traurig sucht du sie
Zu spät, so Frucht als Blüte.

両詩の比較に顧るならば，その何れかゞ模倣であることは一目瞭然たるものがある．発表の時期に従つて，若し Die Blüte の作詩が，譚詩「野中の薔薇」をヘルダーが知つた時より前のものだとしたら？[58] Die Blüte を載せたヘルダー集を一八八五年に発行した．レードリッヒ[59] は Die Blüte を譚詩「野中の薔薇」よりも古いと言いきつているが．その理由とするところは，一人の詩人ともあろうものが，「野薔薇」から die Blüte に退歩するなどとは，殆んど考えられないことであると言うのである．それにしても，ヘルダー自作の die Blüte と形式内容共にこれ程までに相似た譚詩「野中の薔薇」が，仮令遇然にでも民謡として存在し得ることであろうか．然も譚詩「野中の薔薇」は上述の如く民謡としては存在しないとすれば die Blüte は，恐らく創作歌謡[60]なる譚詩「野中の薔薇」の模倣であると考えても，決して誤つた判断ではないであらう，かくて，譚詩「野中の薔薇」が die Blüte の作詩以前にヘルダーに知られていたのであつて，発表の時期の前後の如きは，此際問題の根拠とはならない．然るに．カロリーネ・フラックスランドが，die Blüte を載せた das silberne Buch の編纂に当つていた一七七一年六月，恰もゲーテは die Blüte と符節を合せたような思ひ出話を．ゼーゼンハイムからザルツマン宛の書簡[61]に書き，而もその書簡に更に創作歌謡である譚詩「野中の薔薇」をを暗示するかのような言葉を書添えている．即ち——．

「私は子供の折，戯れに一本の桜桃の木を植えました．木は生立ち．私はそれの花咲くのを見て喜びました．ところが五月の霜が，その花と共に喜びを滅茶滅茶にして了いました．私は一

年待たなければなりませんでした．すると，それは美しく花咲き，そして実りました．然し，私が一つも味見しないうちに，鳥が大部分を食つて了いました．その翌年は毛虫に，次いで食いしんぼうの隣人に，さては黴症にやられて了ひました．然し，私が一つの庭園の主人となつたら，私はまた桜桃の木を植えましよう．こんな色々な不幸があつても，沢山の果物がなつて人々がそれに飽きる程に．」「私はもう一つ籬の薔薇の美しい話を知つています．それは，亡くなつた祖父の身に起つた話で，桜桃の話よりもいくらか教訓的です．時間も大分遅いので，其話を始めたくはありませんが，それは，空想的な混ぜものですから，そのつもりでいて下さい．」

更にゲーテは此「桜桃の木の話」をザルツマンに書いた頃，恋人フリーデリケを去らざるを得ない予感の心境を顧みて，次の告白を，自叙伝に書いている．

「然し最もいけなかつたことは，未熟にして抱く青年の愛情には，何等恒久的な結実が期待されない．そうした青年の常態に就いての正しい考察が残されることであつた．」[62]

桜桃の木の話と，籬の薔薇の美しい話とをゲーテがザルツマン宛に書いた書簡の日付も die Blüte を載せた das silberne Buch をカロリーネ嬢が編纂していた時も，共に六月であつたとすれば，其年の四月まではストラスアルグに居たヘルダーは die Blüte の題材として，譚詩「野中の薔薇」を既にそれ以前に口述を通して知つたのではないか．

扨て然らば，譚詩「野中の薔薇」をば，ヘルダーが口述で知つたのは，誰からであつたろうか．ゲーテの桜桃の木の話とヘルダーの die Blüte の内容とか，殆んど同一考察の感傷のものであり，更に， die Blüte が，前述のように譚詩「野中の薔薇」の模倣である場合，譚詩「野中の薔薇」を暗示するかのような籬の薔薇の美しい話が独り猶お吟味の必要あるを思わせるものとして，残される．然しながら籬の薔薇の美しい話の内容の如何なるものたるかは，我々の確知し難いところであるが，ザルツマン宛の其書簡の内容の性質から見れば，ゲーテは，桜桃の木の話に就いての感傷と同じような感傷をば，籬の薔薇の美しい話に就いても，有つていたように一応窺われるのである．殊に老年の告白に見るように，未熟の愛情の結実の期待なき予感の感傷も事実あつたとすれば，此感傷は彼の作詩に大きなモチーフとなつた筈である．而て恰も此感傷を反語的に裏付けるような彼の小詩がある．当時既に民謡の蒐集に努めて居たゲーテが――多くの学者の推論のように――ストラスブルグ大学図書の Liederbuch Fauls von der Aelst で，かの Sie blühet wie ein Röslein", „Der die Röslein wird brechen ab, Röslein auf der Heiden, Das wird wohl tun ein junger knab,, の句を既に読み知つていたであろうゲーテ而して既に病癒えてエルサスの野に立つ多感のゲーテの前に，可憐の乙女[63]が一輪の薔薇の如くさやけく咲いた時，「彼の若き日の夢が，悉く充たされ」[64]ん，との憧れが，薔薇の儚ない命に対する感傷を蹴つてその感傷の反語としての，いくつかの小詩となつて生れたとしても，それはあり得べきことである．彼も次のように言つている．

「こうした環境の下にあつて，はからずも，久しく覚えたことのなかつた詩作の感興が再び湧いて来た．私はフリーデリケのために，有名な曲に合う歌謡を，いくつかつくつた．それらは，可愛い一巻の小冊子を成すに足りるかも知れないが，残つているものは，極く僅かである．それらは，私の他の書物から容易に発見せられることと思う．」[65]

その一つの小詩が，実にフリーデリケに一七七一年の春に，書送られたものである．（第三節は後にゲーテによつて削除された）

Mit einem gemalten Band.

kleine Blume, kleine Blätter
Streuen mir mit leichter Hand
Gute junge Frühlingsgötter
Tandelnd auf ein lustig Band.

Zephir nimm's auf deine Flügel,
Schlings um meiner Liebsten Kleid!
Und dann tritt sie vor den Spiegel
mit zufriedner Munterkeit,

Sieht mit Rosen sich umgeben
Sie, wie eine Rose jung
– einen kuss! geliebtes Leben,
Und ich bin belohnt genug.

Schicksal segne diese Triebe,
Luss mich ihr und lass sie mein,
Lass das Leben unserer Liebe
Doch kein Rosenleben sein.

Mädchen, das wir ich empfindet
Reich mir deine liebe Hand,
Und das Band das uns verbindet,
Sei kein schwaches Rosenband.

薔薇の生命の儚なさに対する感傷を，ゲーテは当時既に有つていただけに，その反語としての「描かれたるリボンに添えて」の祈りとなつたのであろう．而してゲーテが又当時，薔薇の命の儚なさに対して有つていた感傷とは，実にヘルダーに前に民謡として口述されたところの，而してやがて一九年後の，彼の詩集の中に「野薔薇」となるところの譚詩「野中の薔薇」ではなかつたろうか．果してそうであるならば，譚詩「野中の薔薇」の模倣としての die Blüte の成立も亦，時間的に肯かれるところである．然し，如何なる理由でゲーテが，それを民謡として口述したか，又如何なる事情で，その感傷の反語の望み「描かれたるリボンに添えて」となつては，やがて再び「野薔薇」の Must' es eben leiden の感傷の限りない嘆息[66]となつたか．それは，ストラスブルグ時代，並びに「野薔薇」を公にした一七八九年までの生活体験に於ける彼のエロスの Leiden に問われなければならないであろう．（未完）

文献及び註釈

1 Eckermann; I.P. Gespräche mit Goethe; Vorrede des Verfassers zum 1, und 2, Tl,

2 Eckermann: Gespracho mit Goethe; Dienstag den 27. Januar 1824

3 deus ex machina:「機械で天降る神」の義で，戯曲の筋の運びに行きづまつたとき，神を呼び來れつて仕組を轉換する技巧を意味する．

4, 5 Sigerist, H.: Einführung in die medizin, II Der krauke, S. 104 —105

6 Kätchen Rchönkopf
Goethe: Aus meinem Leben; 1. Tl. 5. Buch

7 Goethe: Aus meinem Leben; 2, Tl, 6, –8, Buch
Hohenstein, F, A,; Goethe; Die Pyramide, 1, Eros=Seismos

8 Goethe: Brief an Behrisch Am Anfang Oktober 1767
den 13. u. 16.
den 17.
den 2. November
Brief an Behrisch; 3. November 1767
10.
Freitag
Sonnabend
den 20.
Sonnabend
Marz 1768
den 26. April 1768

9 Coethe: Die Laune des Verliebten
Ans meinem Leben; 2, Tl, 7, Buch

10 Goethe: Die Mitschuldigen
Aus meinem Leben; 2, Tl, 7, Buch

11 Goethe: Aua meinem Leben; 2, Tl, 6, 7, 8 Buch

12 Goethe: Faust; Prolog im Himmel, Zeile 328–329

13 Schakespeare, W.: Hamlet; a. 1.,sc. 2. ,Frailty, thy name ist woman! から Goethe は引用した．

14 Goethe: Brief an Behrisch; Abend 8 Uhr den 10. Oktoder 1767

15, 16, 17, 18, 19 Goethe: Aus meinem Leden; 2. Tl. 8. Buch

20 Goethe: Wilhelm Meisters Lehrjahre 6. Buch, Bekenntnisse einer schönen Seele.
21 Goethe; Aus meinem Leben 2. Tl., 8. Buch
22 Horatius Elaccus, Quintus: Satire; „Horae memento cita mors venit"「死は目前にあり」より出でたる言葉である.「死の誡め」の意
23 Goeth: Aus meinen Leben; 2. Tl. 9. Buch の句. wie das Erhabene von Dämmerung und Nacht, wo sich die Gestalten vereinigen, gar leicht erzeugt wird, so wird es dagegen von Tage verscheucht, der alles sondert und trennt."
Sigerist, H.: Einführung in die Medizin, Ⅱ Der kranke S. 90
24 Goethe: Faust 1. Tl. Zeile 382－383
Aus meinem Leben 2. Tl. 8. Buch
25 Hohenstein, E. A: Die Pyramide; Eros＝Seismos
26, 27 Goethe: Ausmeinem Ieben 2. Tl. 7.-8. Buch
28 Goethe: Aus meinem Leben 2. Tl. 8. Buch
29 Goethe: Brief an Kätchen Schönkopf den 1. Novemder 1768
30 Goethe: Aus meinem Leben 2. Tl. 8 Buch
31 Goethe: Aus meinem Leben 2. Tl. 8. Buch
82 新約聖書 第五章第四節
33, 34 Goethe: Aus meinem Leben 2. Tl. 8. Buch
35 Goethe: Brief an Langer den 24. November 1768
36 den 17. Januar 1769
37 Goethe: Faust 1. Tl. Zeile 1237
Goethe: Brief des Pastors
木村謹治「ゲーテに於ける信仰の基礎を構成するもの」若きゲーテ研究第四章二，宗教思想の進展と世界構成
38 Goethe: Faust; 1, Tl. Marthens Garten
39 木村謹治 ゲーテ;「ゲーテに於ける信仰の基礎を構成するもの」若きゲーテ研究第四章二，宗教思想の進展と世界構成
40 Sigerist, H, : Einführung in die Medizin Ⅱ Der Kranke S. 103
41 Eckermann: Gespräche mit Goethe Dienstag den 7. April 1829
42, 43, 44 Goethe: Aus meinem Leben 2. Tl. 9. Buch
45 Goethe: Brief an Kätchen Schönkopf den 23. Januar 1770
46 Goethe: Aus meinem Leben 2. Tl. 9. Buch
47 Goethe: Brief an Hermann, Chr. G. den 6. Februar 1770
48 Eckermann: Gespräche mit Goethe; Mittwoch den 17. Febr. 1830
49 Werner, Heinrig
50 Schubert, Franz, Peter
51 Herder, Johann Gottfried
52 Dunger, H. : Zeitschrift für den deutschen Unterricht; Ⅲ, 338
53 Straßburger Universitatsbücherei
54, 55 Uhland, Johann. Ludwig; Schriften zur Geschichte der Dichtung und Sage Ⅲ, 546
56 Wolf, Eugen: Der junge Goethe; Erläuterungen, LXXX Ⅲ Fabelliedchen
57 Flachsland, Karoline
58 木村謹治 若きゲーテ研究第四章二 シエトラスブルグ時代に於ける文學的表現に就いて 221頁
59 Redlich, Karl: Heder's XXV, 433f. dazu 680f
60 Lüben und Nack: Einführuug in die deutsche Literatur S. 247
61 Goethe: Brief an Salzmann am Ende Juni 1771
62 Goethe: Aus meinem Leben 3. Tl. 11. Buch
63 Friederike Brion
64 Goethe; Brief an Salzmann am Juni Ende 1771
65 Goethe ; Aus meinem Leben 3. Tl. 11. Buch
66 Eckermann; Gespräche mit Goethe; Mittwoch den 12. März 1828